

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

－思い出の校舎が地域の絆を深め、地域のまとまりで地域が元気に！－

受賞者 べつまたのうそんこうぼう
別俣農村工房
にいがたけんかしわざきし
(新潟県柏崎市)

1. むらづくりの主体

- (1) 名 称 べつまたのうそんこうぼう
別俣農村工房
- (2) 所 在 地 にいがたけんかしわざきしおおあざくんめ
新潟県柏崎市大字久米1000-1
- (3) 地区の規模 集落の集合体
- (4) 組織の性格 地域内の有志
- (5) 代表者の氏名 ふりがな くわはら かついち
桑原 勝一
役 職 代 表

2. 地区の概要

総人口	農業就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
436人	70人	149戸	44,270ha	5,170ha	－ha	28,802ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第I種兼業農家	第II種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
58戸	49戸 (100%)	15戸 (31%)	5戸 (10%)	29戸 (59%)	5戸 (10%)	13戸 (27%)	31戸 (63%)
地域指定状況			農業地域類型区分				
農振、豪雪、特定農山村			市 町 村		当 該 地 区		
			都市的地域		中間農業地域		

注) 総土地面積、耕地、採草放牧地及び山林については、柏崎市における面積を示す。

3. むらづくりの内容及び成果

(1) 地域の沿革と概要

新潟県柏崎市は、県のほぼ中央部に位置し、民謡「三階節」で名高い米山をはじめ、黒姫山、八石山などの山々の懷に抱かれ豊かな恵みを受けるとともに、日本海に面した42kmに及ぶ長い海岸線からは佐渡島を望む、風光明媚な地方都市である。

別俣地区は、柏崎市の市街地から南方に約13km、^{くんめ みずかみ ほそごえ}久米・水上・細越の3集落からなり、黒姫山の麓に延びる盆地に約130haの水田が広がる純農山村地域である。

市街地から本地区へ向かう道では、見通しのきかない谷筋から山へ分け入り徐々に峠を越えると、視界には前方に広がる水田の壮大な風景が飛び込んで来る。その景観は桃源郷とも思えるほどの美しさである。

本地区は、黒姫山から流下する豊富な水を用いて、水稻を主体とした農業生産を行い、また、多面的機能支払交付金を平成18年から活用し、資源保全等の活動を共同で取り組み、更には、中山間地域等直接支払制度による集落協定を平成27年に締結し、農用地の維持管理活動等について地区内農家が一体となって取り組んでいる。

図1 別俣地区の位置図



写真1 別俣上空から



(2) むらづくりの動機、背景

ア 動機

別侯地区では、農村地域に住みながら、自分の子どもが農業や自然に触れ合う機会が少なくなっていることに気がついた当時の別侯小学校のPTAが中心となり、平成12年に地域の農業者等の協力を得ながら、子ども達を対象にした「別侯田んぼの分校」の取組を開始し、将来、子ども達が大人になった時に“ふるさとを誇りに思うことができる地域づくり”を目指して活動を行ってきた。

これに加えて、少子高齢化と人口流出が進む中で、過疎化によるコミュニティ機能の低下が懸念されるなど、地域の将来に不安が出てきたことから、「別侯田んぼの分校」の中心メンバーであった地区の30歳代から70歳代の有志18人が、「別侯を考える会」を平成15年に自発的に立ち上げ、年齢や性別の隔たり無く地域の将来像を語り合ったことが契機となり、別侯地区の住民全体を巻き込んだことが、今日に至るむらづくりの取組へとつながっている。



写真2 別侯田んぼの分校（田植え）

【「別侯田んぼの分校」とは】

- ・ 平成10年に、文部省（当時）・農林水産省等が設置した研究会で、水田や水路などを積極的に活用した環境教育「田んぼの学校」が提唱され、柏崎市でも行政主体で取組が開始された。
- ・ これを受け、別侯地区では、住民発意による住民主体の独自の取組として「別侯田んぼの分校」を開校し、若い世代の親とその子どもを対象に、水田での農業体験を通して「食」の大切さを感じてもらうとともに、農村交流を通じて生産者と消費者の信頼を深めてもらう取組を開始した。

イ 合意形成

「別侯を考える会」は、平成16年に、小学生以上の全住民を対象として、地区の将来の姿についてのアンケートを実施し、その結果を受けて「みんな

なが生き生きと暮らせる地域」という地区のスローガンを掲げるとともに、地区の将来ビジョンとして『みんなのふるさと別俣』の4つの基本構想を設定した。

さらに、基本構想の柱ごとに4つの部会（生きいきふれあい部会、お宝発掘部会、福々産業部会、校舎利活用部会）を設置し、年間を通じた地域間交流の取組や、平成17年に閉校となった旧別俣小学校の木造校舎の活用などについて部会毎に検討を重ね、将来ビジョンの実現に向けた活動を開始した。

【「みんなのふるさと別俣」の4つの基本構想】

- | |
|--|
| ① 自然の中で人と人がふれあい暮らせる別俣づくり
〔生きいきふれあい部会〕 |
| ② 人、自然、文化のさらなる発掘と継承を目指す別俣づくり
〔お宝発掘部会〕 |
| ③ 地域の特産品づくりで明るい農村別俣づくり〔福々産業部会〕 |
| ④ 木造校舎を活用した体験交流、憩いの場の別俣づくり
〔校舎利活用部会〕 |

特に、別俣小学校の廃校を巡っては、柏崎市教育委員会から校舎の解体・撤去の方針が出されたが、「別俣を考える会」では、市内に唯一残された築60年の木造校舎をふるさとのシンボルとして次世代に残したいという強い思いから、行政や議会に対して校舎の保存を訴えるとともに、地区内の3集落で説明会を開催するなど、校舎の利活用に向けた住民の合意形成を図ってきた。これらの活動が認められた結果、平成18年に校舎を計画的に有効活用することを条件に柏崎市から校舎を譲り受けることとなった。

別俣地区では、以前から農業生産等の共同作業を実施するとともに、「別俣田んぼの分校」の活動を通じて、体験活動や交流活動に参加していた住民が多く、地域内の意思疎通が図られており、さらに、今後は地域を自分たちが維持し、活性化して行かなければならないという意識を一人一人が抱いており、住民の多くがむらづくりの取組に理解があったことが、これらの動きの背景としてあげられる。



写真3 旧別俣小学校 校舎

ウ 経過

平成18年に「別俣を考える会」の中心メンバーである有志8人が、柏崎市から譲渡される校舎の受け皿として任意団体の「別俣農村工房」を設立し、同年から、木造校舎を拠点とした農作業体験や自然体験を中心とする体験交流活動に取り組み、「にいがたなりわいの匠」※による体験交流メニューの提供を開始した。

平成19年には校舎の改修工事に着手し、翌年から、『農村体験交流施設「田舎の学校きらら」』として活動を開始した。

以降、現在に至るまで、下表に示した取組を展開しており、体験交流活動の企画・運営、農家レストランの運営、草刈り等の共同作業、伝統文化の伝承等を活動の柱としている。

※「にいがた なりわいの匠」：農山漁村のなかで培われた暮らしの知恵や技を持つ指導者を「なりわいの匠」として知事認定している制度。

【現在に至るまでの経緯】

時 期	内 容
平成12年	「別俣田んぼの分校」の活動を開始。
平成15年	「別俣を考える会」による将来像の話合い開始。
平成16年	別俣地区住民アンケートを実施。「みんなのふるさと別俣」の4つの基本構想を策定するとともに、基本構想ごとに4つの部会を設置。校舎利活用部会では廃校となる木造校舎の活用内容の検討に入る。
平成18年	有志で「別俣農村工房」を設立し、体験交流活動を開始（「にいがた なりわいの匠」による体験交流メニューの提供）。柏崎市へ木造校舎の活用を要望。
平成19年	木造校舎の耐震改修工事、消防設備の設置工事を実施。
平成20年	木造校舎を体験交流活動の拠点施設（農村体験交流施設「田舎の学校きらら」）として利用開始。
平成21年	農家レストラン開設を見据えて「緑提灯 地場産品応援の店」（五つ星）に登録。
平成23年	木造校舎内に農家レストラン“ふるさと食堂『喜楽来（きらら）』”を開設し、地産地消メニューの提供と憩いの場として活用。 敷地内に別俣コミュニティ振興協議会運営のマレットゴルフ場が開設され、体験交流メニューが増加。

(3) むらづくりの推進体制

ア 別俣農村工房

別俣農村工房は、地域の有志12人（40歳代から60歳代の男10人・女2人、設立時は8人）で構成され、組織には代表と副代表、会計担当を置いている。定例会は年6回行われ、毎回、構成員のほぼ全員が参加し、地区の発展に向けた話し合いが行われている。

また、12人の構成員はいずれも仕事を持つ現役世代であることから、各種イベントや農家レストランの運営には、地区住民が全面的に協力している。

なお、活動の運営資金には、主にオーナー会員（現在60人程度）からの年会費と“ふるさと食堂『喜楽来(きらら)』”の収益を充てている。

イ 連携・支援する組織・団体

■ 別俣コミュニティ振興協議会等との連携

別俣農村工房は、地区住民の自主的な地域活動を推進する組織である「別俣コミュニティ振興協議会」[※]の構成団体の一つであり、他の構成団体や地区内の農業者、行政等と連携・協力しながら地域振興の一翼を担っている。

※ 別俣コミュニティ振興協議会：柏崎市の「校区」単位で組織された住民の意思決定機関で、各集の区長やこども会、消防団、老人クラブ、各種任意団体等で構成。

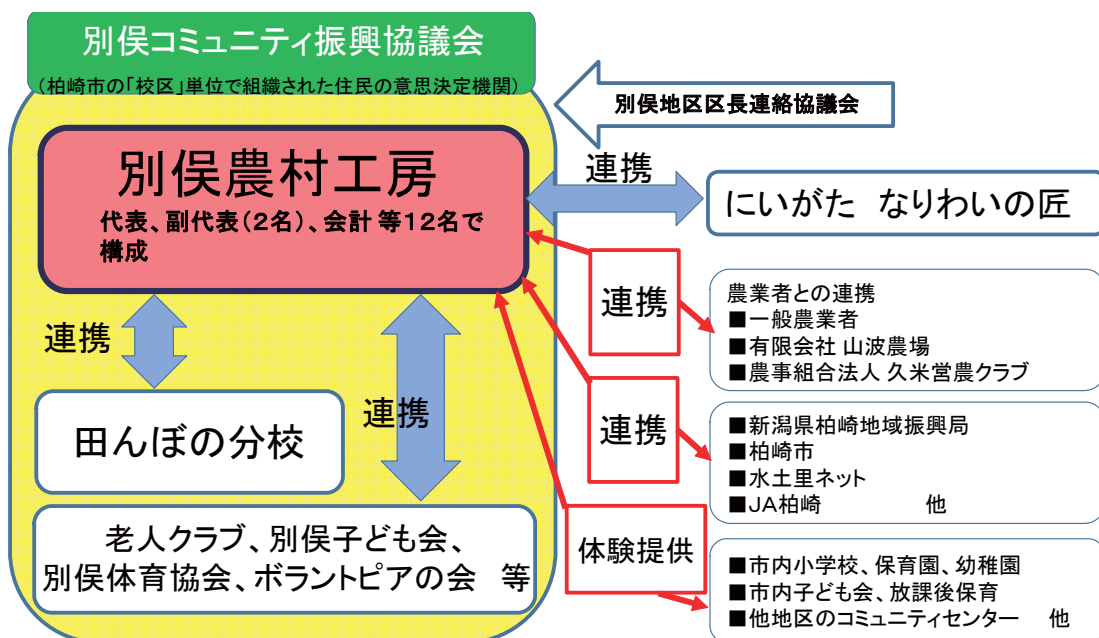


図2 別俣地区の取組推進図

別俣農村工房の各種活動では、構成員12人が中心となり企画・運営に当たっているが、同振興協議会の構成団体との関係については、活動の内容に応じた連携体制が構築されている。

別俣農村工房は、別俣地区の有志で構成された団体であるが、別俣農村工房と連携・協力体制にある別俣地区コミュニティ振興協議会は、地区の子ども会や老人クラブ、消防団、女性の任意団体などで組織されており、別俣農村工房を中心としたむらづくりの取組には、3集落の住民が広く関わっている。

加えて、同工房は保育園や小学校等の教育機関のほか、地区内の農業者・農業生産法人等とも連携しており、年齢・性別や農家・非農家を問わず、地区の住民のほとんどが何らかの形で活動に参加している。

特に、地区内の「にいがた なりわいの匠」（平成27年3月現在、地区内では50人(延べ64人)が認定）は、その多くが高齢者で「老人クラブ」の会員であるが、様々な技術を活かし、各種体験活動の指導者として活躍している。高齢者が子ども達と一緒に活動することや細やかな技術を屈指して工芸品などを作ることが、世代間交流や技術の伝承につながり、また、高齢者自らの生きがいにもなっている。



写真4 なりわいの匠 わら細工実演

【「別俣地区コミュニティ振興協議会」の構成団体との連携状況】

団体名	内 容
老人クラブ	「にいがた なりわいの匠」を中心にわら細工などの工芸品作りや郷土料理の指導
別俣子ども会	子どもを対象にした行事の運営
ボランティアの会	イベント等における料理の提供や郷土料理の指導
キッチンひまわり隊	イベント等における料理の提供
別俣体育協会	スノーフェスティバルや野外活動の運営
別俣消防団	伝統行事の実施時における安全対策

- 地区内の農業者等との関係（「田んぼの分校」の運営に当たって）

地区内の農業者や農業生産法人（有限会社「山波農場」、農事組合法人「久米営農クラブ」）は、農作業体験に使用する農地や大型農業機械等の利用協力、作物栽培技術や作業ノウハウ等の指導を行っている。
- 行政・団体との関係（別俣農村工房が主体となった取組）

別俣農村工房と柏崎市、県（地域振興局）が連携しながら、グリーン・ツーリズムの受け入れを積極的に行うとともに、地産地消や食育の推進にも取り組んでいる。また、別俣農村工房の役員が主体となり、中山間地域等直接支払制度や多面的機能支払制度、中山間地域総合整備事業等の活用により、地域の活性化や環境保全、生産基盤の整備等について取り組んでいる。
- 市内の小中学校等との関係
別俣農村工房の活動の基本的な理念が「子ども達の健全育成に役立つこと」であることを理解の上、市内の小中学校や子ども会等の様々な活動の場として体験メニューを活用している。

(4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与

ア 農業の生産、流通面

別俣農村工房が農作業体験の受け入れに使う水田では、有機質肥料を使用し、農薬を抑えたこだわりの栽培方法でコシヒカリを生産している。刈り取った稲は、こだわりの稲架^{はさ}で天日乾燥し、良食味米生産に努めている。生産されたコシヒカリは、地場農産物のブランド化のため、当地域に生息する希少昆虫の名から「ハッチョウトンボ米」と名付け、商標登録し、農家レストラン“ふるさと食堂『喜楽来(きらら)』”（後出）などに提供している。

イ 来訪者への郷土料理の提供

おもてなしのひとつとして、体験交流活動での来訪者等に地場農産物を使用した昼食を提供したいとの思いから、平成23年に木造校舎内に農

家レストラン“ふるさと食堂『喜楽来(きらら)』”を開設し、地元産の新鮮な野菜や山菜を使った郷土料理を提供している。営業日時が、第2・第4の土・日曜日の昼間に限定されているにも関わらず、昔懐かしい木造校舎で味わう地元のお母さんたちの手作り料理が人気を呼び、年間約1,900人（H27）が来店している。



写真5 ふるさと食堂「喜楽来」

さらに、インターネット「緑提灯 地場産品応援の店」に登録し、地場農産物を提供する店として広く情報発信しているほか、旬の野菜等の地場農産物等の直売（不定期）も行っている。

特に、手作りによる味噌は、昔懐かしい味わいの味噌汁や料理の調味料として来訪者や会員に喜ばれているほか、野菜類は別侯農村工場の畑だけでなく、地区の農家からも供給を受けている。

また、郷土料理体験においても、地区内や近隣集落で収穫された野菜、そば、山菜、笹等を使用しており、特に近年は、山菜の人気が高く使用量も増加しているため、春に採取した山菜は塩漬けすることで年間を通して使用できるよう努めている。



写真6 そばづくり体験

【「ふるさと食堂『喜楽来』」の概要・実績】

項目	内容
規模	席数数：35人
営業日時	毎月第2、4の土曜日及び翌日曜日、午前11時から午後2時まで。その他団体予約時。
メニュー	郷土料理（季節の野菜、山菜をおかずにした定食）、おやき、そば、マレットカレー等
地産地消の推進や食育の取組	「緑提灯 地場産品応援の店」に取り組み、地産の食材を多く使用するとともに「いただきます」「ごちそうさま」の励行による食物への感謝と食の大切さを醸成。
実績（平成27年）	来客者：1,870人、 売上げ：1,459千円 （H26：1,395人、売り上げ970千円）

ウ 生産力の向上、生産の組織化等

別俣農村工房のオーナー会員に対して、会員特典として、年会費の半額相当分の「ハッコウトンボ米」や杵つき餅などの地場農産物をプレゼントしており、この取組は、別俣地区で生産される農産物や加工品のファン獲得に貢献するとともに、別俣農村工房の活動を継続的に応援している会員の確保につながっている。

また、“ふるさと食堂『喜楽来』”において、地元食材を使用した郷土料理や山菜料理を中心に提供することにより、地元野菜の生産が拡大し、地産地消の推進に寄与している。

エ 経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画等

■ 経営の改善（所得向上）

各種活動により別俣地区のファンを獲得することで、農産物の販売先の確保につながり、この結果として地区の農業者の収益確保につながっている。

また、“ふるさと食堂『喜楽来』”の調理担当者や体験交流活動の指導者には報酬が支払われており、別俣農村工房の活動による利益が高齢者を含む住民へと還元されている。

■ 後継者の育成・確保（次代を担う子ども達への文化・技術の伝承）

地区内の子ども達が、故郷の農村で培われた文化や農法を体験することが、新たな可能性を生み出す種となっている。「にいがた なりわいの匠」の技が子ども達にとっては興味深く、体験交流活動がその技を体験できる貴重な機会となっていることから、子ども達の感性や知識の向上に役立つとともに、子どもの地域への愛着心を育むことに寄与している。

また、各種行事等の運営や準備の際には、地域の子供達から大人までが一緒に楽しみながら参加できるよう努めており、世代を超えたつながりが醸成されるとともに、地域の子供達の中で地域活動に積極的に参加する意識が高まっている。

特に、将来の就農や就業を希望する地元出身の農業大学校生や生徒（中学校）が出始めており、更には就職や修学のために地区外へ転出した若者が各種行事・イベントに駆けつけるなど、次世代の後継者候補の育成が図られている。

■ 女性の経営参画

イベント時の料理提供や“ふるさと食堂『喜楽来』”の運営等において、女性の活躍は別俣農村工房の活動の大きな底力になっている。郷土料理の伝承や食材になる野菜の生産、漬物加工や山菜の保存など、様々な場面で力と技を発揮している。

また、来訪者に喜ばれるようなメニューの開発のため、調理担当者は、他の料理店へ出向き研修を重ねるなど積極的な自己研鑽に努めている。このような努力により提供する料理は、地区内外からの来訪者に好評であり、それが自分たちの生き甲斐となっている。

(5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与

ア コミュニティ活動の強化

“ふるさと食堂『喜楽来』”は、体験交流活動の来訪者だけでなく、地区内の住民にとっても憩いの場所となっており、特に高齢者にとっては普段からの楽しみであるマレットゴルフ等の屋外活動終了後の社交の場となっている。

特に、不定期ではあるが夜は居酒屋として活用し、地域住民の語らいの場として大いに重宝され、本地域にとってはコミュニティ活動の中核の1つとして位置づけられている

また、別俣農村工房では、地域と連携して、古くから3集落に伝わる里神楽舞や、正月の「サイの神」、春の「里神楽奉納」、夏の「稲虫送り（松明を振って害虫を駆除するための伝統行事）」など古くから農村で行われてきた伝統行事の継承にも取り組んでいる。春の大祭での里神楽舞の披露においては、別俣農村工房のメンバー自らが将来の伝承者になれるよう、衣装の着付けや舞準備などに協力するとともに、普段から里神楽舞の稽古に参加している。

さらに、「一度途絶えたものの「子ども達に伝統文化を」との思いから復活



写真7 里神楽舞

させた「稲虫送り」は、体験活動のメニューに位置付けており、幻想的な夏の夜の風物詩として地区内外からの参加者が楽しめるとともに、地区外の縁者が訪れる機会にもなり、地区全体の結束力の強化につながっている。



写真8 稲虫送り

イ 共同活動による生活・環境整備等

地区の一带は、木造校舎を中心に懐かしさを感じる田園風景が広がっており、この景観に魅力を感じ、大切に思ってくれる来訪者に安らぎを提供するため、多面的支払交付金や中山間地域等直接支払交付金等を活用し、地区住民と共に、草刈りや棚田の保全、植栽等の共同作業に取り組んでいる。

また、校舎内には昔使われていた農機具や生活用品等が展示されており、伝統的な農法を学習することもできる。



写真9 花の植栽作業

【生活・環境整備に向けた共同作業】

時 期	内 容
4月～9月	地区内の主要道路脇の草刈り、四季を通じた花の植栽
5月	別俣地区大運動会前のグランド除草作業
8月	星空音楽祭前のグランド除草作業
4月～10月	棚田の保全、稲架づくり
11月	木造校舎冬囲い

ウ 都市住民との交流等

別俣農村工房では、農作業体験以外にも別俣コミュニティ振興協議会メンバーと連携して、「星空音楽祭」や「スノーフェステバル」等のイベントを通じて、地域外の住民等との交流の機会を増やしている。

体験交流活動等に訪れる子ども達や、“ふるさと食堂『喜楽来』”への来訪者との交流は、地区住民の励みや生き甲斐づくり、地区全体の活性

化に寄与している。多くの体験メニューの指導者は、県の「にいがた なりわいの匠」の認定を受けた高齢者が中心で、その丁寧な指導や優れた伝統的な技の披露により、参加者をうならせる場面が多い。また、子ども達との体験交流の機会は、高齢の指導者にとって活躍の場であり、生き甲斐ともなっている。

【交流人口（来訪者）の推移】

○体験交流活動

H18年300人 → H21年1,772人 → H26年1,562人

○ふるさと食堂『喜楽来』 H23年861人 → H27年1,870人

エ 女性の活躍

別俣農村工房のイベント時には、40歳から50歳までの女性が中心の団体「キッチンひまわり隊」が調理や接客面で多いに活躍し、女性ならではのきめ細やかなおもてなしが、来訪者に喜ばれている。

また、一部の女性達は、伝統的な農作業の伝承にも活躍しており、昔から女性が担当していた田植え時の手植え作業や、稲刈り時の稲わらの結束等の作業があり、これらの作業は子ども達に指導しやすく、体験に適した作業となっている。女性の丁寧で優しい指導が世代を超えたふれあいの場面になっている。

4 むらづくりの特色と所見

別俣農村工房は、伝統的な農作業や郷土料理、また地区に伝わる行事・芸能等の農村文化、子どもからお年寄りまでの地域住民等を地域の宝としてとらえ、地域の宝を活用した交流を柱に、地域住民が一体となったむらづくりを進めてきている。

(1) 全住民参加による活動

廃校となった別俣小学校の木造校舎を地区のシンボルとして位置付け、そのシンボルのもとに世代を超えた全住民が団結し、さらに地区外からの応援も得ながら、活動を継続している。

(2) ビジョンに基づく着実な取組

小学生以上の全住民を対象とした地域づくりアンケートにより集約され

た意見・要望等を踏まえ、地区の将来ビジョンである『みんなのふるさと別俣』の4つの基本構想」を策定し、このビジョンに基づき、むらづくりに着実に取り組んでいる。

(3) 各世代が取り組める場を設定

子どもから高齢者までの住民全員が、目指す方向を共有し、様々な形で活動に参加ができる場を提供し、これに対して個人が積極的に取り組むことにより、住民の誇りや生きがいにつながっている。

特に、技術とその知恵の玉手箱であるお年寄り、バイタリティあふれる女性は、活動の縁の下の力持ちでもあり、なくてはならない存在である。

(4) 都市住民との積極的な交流

都市部からの来訪者を迎え入れるための取組について、常に追求しており、その企画・立案を創り、準備段階から住民とともに活動し、来訪者が再び訪れたいくなるような充実した取組を展開している。

(5) 新たな取組への探求

現状に満足することなく、地域と連携しながら地域の活性化に向け新規事業を検討することを心がけており、住民からの意見を取り入れながら、将来にわたり“ふるさとを誇りに思うことができる地域づくり”を目指している。

5 最優良とする理由

別俣地区では、過疎化・少子化が進み、地域の将来に不安が広まりつつある中、次世代を担う子ども達が大人になった時に、「ふるさとを誇りに思ってもらいたい。」との強い思いを持って、有志が立ち上がったことからむらづくりが始まった。

130余年という歴史ある小学校が幕を閉じ、市内に残る唯一の木造校舎(築60年)が解体される事態には、地域のシンボルである学び舎を次世代に残すため、その存続に向けて地域の隅々まで説明に回り、地域住民の合意形成を得たことがその後のむらづくりの原点『みんなが生き生きと暮らせる地域』になっている。

別俣農村工房は、このような活動の中心となり、条件不利とされる中山間地域にあっても、伝統的な農作業や郷土料理、地区に伝わる行事・芸能等の農村文化、子どもからお年寄りまでの地域住民、さらには、ややもすると負

の遺産になりかねない廃校までを地域の宝（これらは、いわば日本全国いたるところに眠る宝）として活かして、自らの地区をみんなの手で住み良くしていくむらづくりを様々な交流を身の丈に合わせて実践するとともに、地域の将来を担う子ども達に、先に行く大人達が地域の宝を活用した体験を一緒にすることにより地域の良さを確実に伝承させており、今後とも発展が期待できる。

また、別俣農村工房の取組を全国に発信することにより、観光名所や旧跡も無く人を呼び寄せる資源がないと嘆く地域であっても、地域住民が結束し、地域に眠る宝を掘り起こして、地区内における世代間交流、都市住民との地区外交流を通じたむらづくりが可能となることを示す優良な事例であるといえる。